

第7回

研究発表会 in 東京

於：タワーホール船堀

平成 29 年 7 月 3 日 (火)

研究発表会、企業展示、懇親会

7 月 4 日 (水)

研究発表会、企業展示、国際シンポジウム

illustration by Freepik

1. はじめに

第7回研究発表会は平成30年7月3日(火)・4日(水)に東京都江戸川区に位置する「タワーホール船堀」にて開催いたしました。まだ梅雨どきであり天候の心配がございましたが、影響もなく開催できました。研究発表会にご支援いただいた実行委員会の皆様、また、ご参加いただいた皆様のお陰で無事開催できました。厚く感謝いたします。

本年度は、学会発足から7年目にあたります。新たな試みとして学会表彰の制度が設けられ、記念すべき第1回、第1号の表彰式を大ホール会場で開催しました。また、研究発表会で発表いただいた案件について、特別表彰として優秀口頭発表賞および優秀ポスター発表賞の選考も実施



▲タワーホール船堀と展望タワーからの眺め(公式ホームページより)

ました。

以上の2件も含めまして、第7回研究発表会の開催状況を報告いたします。

開催プログラム

		5階大ホール	5階小ホール	2階イベントルーム
7月3日(火)	午前	開会セレモニー 研究発表：口頭	研究発表：口頭	企業展示(常設)
	午後	企業展示・研究発表：ポスターセッション(2階イベントルーム)		
		企画セッション(1)	研究発表：口頭	企業展示(常設)
		学会表彰式	-	意見交換・懇親会
7月4日(水)	午前	研究発表：口頭 企画セッション(2)	研究発表：口頭	企業展示(常設)
	午後	企業展示・研究発表：ポスターセッション(2階イベントルーム)		
		国際シンポジウム EUより元IAEA、ウクライナの研究者(在福島大学)		

参加者等の集計

項目	数量	備考
口頭発表件数	54件	内、8件の企画セッション発表も含む
ポスター発表件数	43件	
企業出展件数	24団体	企業系17件、公共団体系5件、NPO系2件
参加者数	350名	2日間で延べ入場者数約700名
懇親会参加者数	120名	

2. 開催準備

開催準備は、高所からのアドバイザーとなる運営委員会と準備および開催日の運営実務を行う実行委員会を組織して進めました。開催にはいろいろな準備・対応が必要ですが、必要な準備運営業務を8つに区分し、各実行委員の皆様へ役割を分担していただきました。開催日の対応には受付からはじまり多くの人材が必要となります。そこで実行委員会等(48名)にご就任いただきました。また、その中から活動のエンジンとして各業務のリーダー、サブリーダー等のかたに実行幹事(24名)をお願いしました。

開催準備のキックオフの実行委員全体会議(1回目)を平成29年10月27日に行い、以後、開催当日までに実行幹事会会議4回、最終調整の実行委員全体会議(2回目)を平成30年6月15日に実施し、7月3日・4日の開催に至りました。実行委員は様々な会員企業等からご参加いただいている関係から、チームワークの醸成のため実行委員会の後には意見交換を兼ね懇親会を開催しました。本研究発表会が順調に無事開催できたのは運営委員会および実行委員の皆様のご支援とチームワークの賜物と思います。実行委員の皆様には学会関係者一同より厚く感謝いたします。

3. 第7回研究発表会開催状況

(1) 開催セレモニー

開会セレモニーを実行幹事の島崎様の司会により7月3日9時半より行いました。

学会側から森田理事長および大迫実行委員長から、「発災からまた学会の発足から7年が経過しましたが、学会の

役割はこれからだという宣言と、ご参加の皆様へ感謝の挨拶がありました。また、ご多忙中にも関わらず来賓としてご挨拶いただいた環境省審議官の和田様からは、本学会の協力や活動に対する謝辞やこれからの活動を期待しているとの趣旨のご挨拶がありました。



▲来賓祝辞：和田篤也環境省大臣官房
政策立案総括審議官

▲開催主催挨拶：
大迫政浩 実行委員長



▲開催主催挨拶：森田昌敏 学会理事長

(2) 各セッション発表および企画セッションの状況

口頭発表セッションのプログラムおよび各セッションの座長講評・総括等については、p138より座長報告を掲載していますのでそちらを参照してください。各セッションとも会場内から活発な質問や意見がありましたが、女性研究者の発表が増加したこと、会場内から質疑が大変熱心であったことが印象的でした。

また、7月3日の企画セッションの「減容化・中間貯蔵・県外処分に向けた技術戦略」では福島県在住の立場からの厳しい意見もあったかと思えます。7月4日の企画セッション「環境放射能と環境委再生に関わる最近のトピックス」では、各発表者と会場との質疑時間の終了後も舞台上に移動し、活発な意見交換が行われていたことが印象的でした。



▲大ホール口頭発表状況



▲小ホール口頭発表の様子



▲口頭発表会場での質問風景



▲7月3日の企画セッション



▲7月4日の企画セッション

▼企画セッション後も
舞台上で続く
ディスカッション



(3) ポスター発表および企業展示

ポスター発表と企業展示は同じ会場で開催しました。企業展示では放射能環境汚染対策に資するとする企業の技術等のPR、福島県の復興再生に関わる各種公的団体や自然環境関連のNPO等の展示がありました。この会場には市民皆様にも気軽に覗きにきていただきたいという思いもあり、入場無料で市民開放としました。環境関連新聞等に市民開放を報道していただくとともに、玄関先の開催看板にもその旨(入場無料)を表示しましたが、効果はなかったようです。例年、この傾向がありますが、テーマが専門的で難しすぎるのだろうと考えています。

学会が主催する企業展示であり、展示によるPR効果は限られていますが、本研究発表会を支援して出展いただいた右の企業・団体の各位に厚く感謝いたします。また、第6回から2度目の展示をいただきましたが、尾瀬地域で駆除された鹿革の利用加工実演をいただいた市民活動の「おぜしかプロジェクト」様、これからの福島浜通り地区の再生を目指す「福島イノベーション構想推進機構」様には誌上から応援をさせていただきます。

第7回企業展示参加企業等の一覧

太平洋セメント株式会社
 大栄環境グループ三重中央開発株式会社
 株式会社クボタ&クボタ環境サービス株式会社
 萩尾工業株式会社
 多機能盛土研究会
 東京ホールディングス株式会社
 株式会社松浦電弘社
 富士電機株式会社
 株式会社スカイプルー (広告参加)
 株式会社流機エンジニアリング
 新日鉄住金エンジニアリング株式会社
 株式会社荏原製作所&日本化学工業株式会社
 いてあ株式会社
 株式会社堀場製作所
 株式会社トータル環境
 環境・遮水管理リモートセンシング研究会
 株式会社東邦電探

市民団体・行政関連団体等の一覧

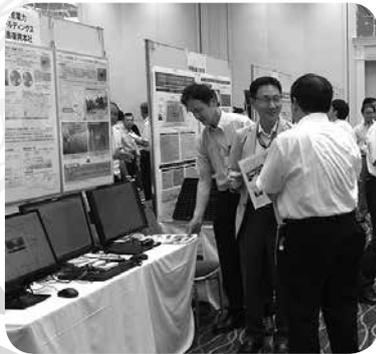
おぜしかプロジェクト
 日本自然保護協会
 一財) 福島イノベーションコスト構想推進機構
 環境再生プラザ
 福島県環境創造センター
 中間貯蔵・環境安全事業株式会社
 国立研究開発法人国立環境研究所



▲ポスター発表会場



▼企業展示ブース



ポスター発表・企業展会場より

そこここで熱心な質疑が…



▲ JESCO の展示



▲ NPO おぜしかプロジェクトの展示



▲ (一財) 福島イノベーションコスト構想推進機構の展示

4. 国際シンポジウム開催状況

国際シンポジウムは環境省との共催で毎年開催しております。海外への我が国の環境放射能対応の情報発信の一助となること、海外の立場から我が国の状況を見た忌憚のない意見が聞けることを期待して開催しております。

開催準備では海外からの招聘講演者の選定がいつも課題となります。環境省や福島大学等に相談・助言をいただき人選をいたしました。今回は福島大学環境研究所に特任教授で来日しているヴァシル・ヨシエンコ博士（ウクライナ）と元IAEAのゲルハルト・プレール博士（ドイツ）にお願いしました。我が国からは環境省環境再生・資源循環

局除染作業業務室長である奥山正樹氏より講演をいただきました。

ドイツから来日するゲルハルト・プレール博士の旅程の確定、講演資料の先行入手などのコンタクトは大変煩雑でしたが、国際シンポジウムの実行幹事である亀元宏宣氏が代表を務めるEAI株式会社社員のゾイ・ゴザム氏がコンタクト役をしてくださいました。また、ゾイ氏には国際シンポジウム当日もアテンド等のお手伝いをいただきました。大変お世話になり、厚く感謝いたします。余談ですが、ゾイ・ゴザムという名前からどのような人物かと想像しましたが、若手の女性社員でした。



◀来日中の招聘講師も交えての事前打ち合わせ



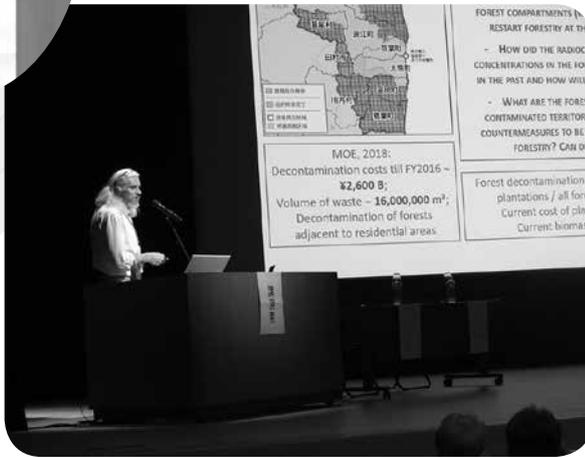
▲森田理事長より開会の挨拶

▼学会理事の植弘座長による司会でスタート



◀奥山正樹 環境省 環境再生・資源循環局除染業務室長

▼福島大学に在任中のヴァシル・ヨシエンコ特任教授



講演者

国際シンポジウム会場より

海外の立場からは
日本の状況はどう見えるのか



▲ドイツより来日の元 IAEA ゲルハルト・ブレイル博士と通訳の柴田康行氏



◀講演後のディスカッション



◀講師のお二人と通訳の八十島光子氏

開催の挨拶を森田昌敏学会理事長が行いました。また、会の進行は学会から植弘崇副理事が座長を担当しました。海外からの招聘講師は英語で講演しますが、同時通訳はコスト面で厳しいことから、今回も逐次通訳としました。会場とのディスカッションでは通訳に苦慮している様子が窺えましたが、専門的な質疑のやり取りを考慮すると逐次通訳は適切な方法であり、会場と活発な意見交換ができた

と考えます。これも、今回も通訳役をしていただいた国立環境研究所の柴田康行氏と「いであ株式会社」の八十島光子氏のおかげです。ご両者が黒子に徹し、通訳をしている姿が大変印象的でした。本当にご両者には厚く感謝いたします。なお、次ページに開催プログラムを掲載しますが、要旨集が学会 web サイトより PDF でダウンロードできますのでご参照ください。

プログラム概要



環境放射能対策にむけての国際シンポジウム

International Symposium on Remediation of Radioactive Contamination in the Environment

7月4日(水) 大ホール Wednesday, July 4th, 2018 Large Hall

14:00	開会の挨拶 Opening
14:05-14:35	<p>演題 1. 被災地の環境再生に向けた取組の現状 Environmental Remediation in the Disaster Areas in Japan</p> <p>奥山 正樹 Mr. OKUYAMA, Masaki</p> <p>環境省 環境再生・資源循環局 除染業務室長 Director, Office for Decontamination of Radioactive Materials and International Cooperation, Environmental Regeneration and Material Cycles Bureau, Ministry of the Environment, Japan</p>
14:35-15:25	<p>演題 2. 福島第一原子力発電所における事故後の修復政策並びに修復プログラム - 国際的ガイダンス並びに経験に基づく考察 Remediation policy and remediation programmes following the accident in the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant - considerations in view of international guidance and experience</p> <p>ゲルハルト・プレール Dr. Gerhard Proehl</p> <p>元 IAEA former International Atomic Energy Agency; Head of the Assessment and Environmental Management Unit, Division for Nuclear Safety and Security</p>
15:25-15:40	休憩 Break
15:40-16:30	<p>演題 3. 福島県における放射能汚染地域における森林に関する展望 Perspectives of forestry at the radioactive contaminated territory of the Fukushima Prefecture</p> <p>ヴァシル・ヨシエンコ Dr. Vasyl Yoschenko</p> <p>福島大学環境放射能研究所特任教授 Institute of Environmental Radioactivity at Fukushima University Project Professor</p>
16:30-17:00	<p>ディスカッション Discussion 会場からの質問を中心としたディスカッション</p>
	閉会 Closing



講演者略歴 Speaker Profiles



Mr. OKUYAMA, Masaki: 奥山 正樹

*Director, Office for Decontamination of Radioactive Materials and International Cooperation,
Environmental Regeneration and Material Cycles Bureau,*

Ministry of the Environment, Japan

環境省 環境再生・資源循環局 除染業務室長

1990 Graduated from Tokyo University of Agriculture and Technology

1991 Entered the Environment Agency

1999 Professional Engineer in Environment Discipline (National Certification)

2011 Director, Biodiversity Center of Japan

2013 Assistant General Manager, Administration Department,
Japan Environment Safety Corporation (JESCO)

2015 Principal Policy Coordinator, Fukushima Office for Environmental Restoration

2017 Senior Assistant for Policy Planning, Environmental Regeneration and
Material Cycles Bureau (also served as Director, Office for Decontamination
of Radioactive Materials and International Cooperation in the same Bureau)

1990 東京農工大学農学部卒業

1991 環境庁入庁

1999 技術士(環境部門)

2011 生物多様性センター長

2013 日本環境安全事業株式会社(JESCO) 管理部次長

2015 福島環境再生事務所首席調整官

2017～現職

Dr. Gerhard Proehl: ゲルハルト・プレール

former International Atomic Energy Agency;

Head of the Assessment and Environmental Management Unit, Division for Nuclear Safety and Security

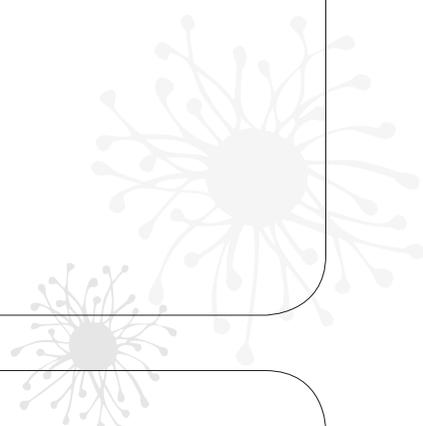
元 IAEA

Education: Graduation from the Technical University Munich in Agricultural Sciences in 1980
(diploma) and 1990 (PhD)

Employment:

1981–2009: Helmholtz Zentrum Munich, Institute of Radiation Protection, Deputy Head of Risk
Analysis Group

2009–2017: International Atomic Energy Agency; Head of the Assessment and Environmental
Management Unit, Division for Nuclear Safety and Security



Working fields:

- Assessment of exposures subsequent to planned and unplanned releases from facilities of the nuclear fuel cycle
- Biosphere modelling for long term safety studies of nuclear waste disposal facilities
- Dose reconstruction for the population living in and evacuated from areas contaminated by nuclear accidents
- Radiation protection of the public and the environment
- Remediation policy and remediation techniques
- Clearance of material containing low levels of radionuclides
- IAEA Safety Standards focusing on ‘discharges of radionuclides to the environment’, ‘clearance of material’ and ‘remediation of contaminated areas’

Memberships:

- Committees “Radioecology” and “Radiation Protection at Nuclear Facilities” of the German Commission of Radiation Protection (until 2009)
- ICRP Committee 5 “Protection of the Environment”(2005-2011), observer on behalf of IAEA (2011-2015)

Recent activities:

- Scientific Secretary of the IAEA Model test and comparison programmes EMRAS II, MODARIA I and II
- Participation in IAEA missions (2011 and 2013) to Japan on remediation of areas affected by the accident in the Fukushima-Daiichi Nuclear Power Station
- Co-chair of Volume 5 “Post-Accident Recovery” of the IAEA Report “The Fukushima Daiichi Accident”
- IAEA cooperation with the Fukushima Prefecture on “Decontamination and Remediation” (2013-2017)

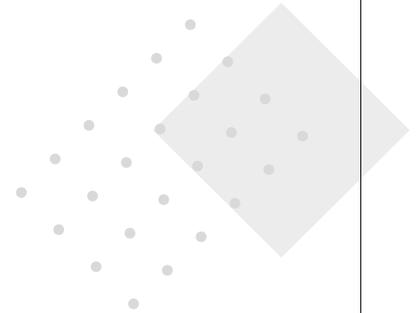
1955年、ドイツ・ゲーラ生まれ。ミュンヘン工科大学の農業科学を1980年に卒業し、1990年に博士号(理学博士)を取得した。1981年から2009年まで、ミュンヘンのヘルムホルツセンター(ドイツ環境健康研究センター)、放射線防護研究所に勤務し、その間、リスク分析グループの副長をつとめる。2009年から2017年までIAEA(国際原子力機関)に在籍。核安全・セキュリティ局の評価・環境管理ユニット長をつとめた。核燃料サイクル施設からの計画的ないし突発的漏えいによるばく露の評価、核廃棄施設の長期安全性研究のための生態圏モデル作成、核関連事故の汚染地に居住しそこから避難した集団のばく露推定、一般市民並びに環境の放射線防護、除染政策ならびに除染技術、低レベル放射性物質含有物の認可、「放射性核種の環境への排出」、「物質の認可」、「汚染地域の修復」に焦点を当てたIAEA安全基準の策定、などの分野で活動を行ってきた。ドイツ放射線防護委員会の中の「放射線生態学」並びに「核施設での放射線防護」委員会委員(2009年まで)、ICRPの第5委員会「環境の防護」のメンバー(2005～2011)及びIAEA代表オブザーバー(2011～2015)などを歴任。最近では、IAEAのモデル試験並びに比較プログラムEMRAS II、MODARIA I並びにIIの科学的事務局、福島第1原子力発電所事故の影響エリアの修復に関するIAEAミッション(2011年及び2013年)への参加、IAEAレポート「福島第1事故」の第5巻「事故後の復旧」の共同座長、IAEAと福島県の共同事業「除染と修復」(2013～2017)などの活動を行った。

Dr. Vasyl Yoschenko: ヴァシル・ヨシエンコ

Project Professor

Institute of Environmental Radioactivity, Fukushima University

福島大学環境放射能研究所 特任教授



Education:

June 1989 MSc in Physics, Kyiv National University, Ukraine

October 1995 PhD Biology (Radiobiology) , Kyiv, Ukraine

Job Experience:

He joined Ukrainian Institute of Agricultural Radiology (UIAR) in August 1989 and worked there for almost 25 years till leaving for Fukushima University in January 2014. Since 1998, he was a head of laboratory of radioecological monitoring, modelling and dosimetry at UIAR. He acquired a large experience on the wide range of the problems related to the Chernobyl accident, including the radionuclides dynamics in forest and agricultural ecosystems, dosimetry of human and biota, transformation of the Chernobyl fuel particles in the environment and their behavior in the organism, atmospheric transport of radionuclides during the wildland fires etc.

Since February, 2014, he has been working as a Project Professor at the Institute of Environmental Radioactivity. The main aims of his research are elucidation of the mechanisms and modelling the long-term dynamics of radiocesium cycling in the forest ecosystems, and identification of the radiation effects to the tree species in Fukushima.

学歴:

1989年 6月 キエフ国立大学(ウクライナ)において物理学で修士号取得

1995年 10月 キエフ国立大学(ウクライナ)において生物学(放射線生物学)で博士号取得

職歴:

1989年 8月より、ウクライナ農業放射線学研究所(Ukrainian Institute of Agricultural Radiology (UIAR))にて、2014年 1月に福島大学に移籍するまでの約 25年間所属。1998年より、UIARにおいて環境放射能モニタリング、モデル構築、そして線量測定法に関する研究の責任者を務めた。チェルノブイリ事故に関する諸問題に係る多岐にわたる経験を積んできた。例えば、森林や農業の生態系での放射性核種の環境動態、人や動植物における線量測定、環境中でのチェルノブイリ核燃料粒子の変遷と生物中での挙動、そして森林火災による放射性核種の大気移動などがある。

2014年 2月に環境放射能研究所において特任教授に就任。主な研究目的は、森林生態系での放射性セシウムの長期的環境動態に関するメカニズムの解明とモデル構築、そして福島における樹木種への放射線の影響の特定である。



5. 意見交換懇親会の状況

7月3日(火)の口頭研究発表および学会表彰のセレモニー終了後18時から、タワーホール船堀の2階イベントルーム福寿で開催しました。実行委員のメンバーも含めて、約120名の参加をいただきました。たいへんにぎやかな懇親会となりました。

恒例となっていますが、塚田高明学会副会長の司会により懇親会が進行しました。

まず、学会を代表して米田稔学会長より研究発表会および懇親会参加の皆様へ御礼の言葉がありました。また、来賓としてご出席いただいた中間貯蔵・環境安全事業株式会社(JESCO)の小林正明社長より祝辞をいただきました。小林社長からは、本学会の活動への期待と、協力していきたいということ、また、JESCOの社長に就任してホヤホヤ

ですが、これから頑張りますという趣旨のご挨拶がありました。恒例の乾杯のご発声は、第一回、第一号目の学会賞を授賞された田畑日出夫学会顧問(いであ株式会社社長)からいただきました。

宴も半ばに入ってから、本日、学会表彰を授与された皆様から受賞のご挨拶を一言いただきました。2日目の国際シンポジウムのためにすでに東京入りしていた元IAEAのゲルハルト・ブレール氏にもご参加いただき、周辺の参加者と意見交換をされているようでした。料理の注分量が適切であったのか、約1時間半すぎに料理類も残り少なくなってきたので、司会の指名により峠和男実行幹事長より、研究発表会盛会のお礼と来年の発表会へのご支援のお願いの言葉で中締めを行い終幕となりました。

来賓の小林正明 JESCO
社長より祝辞▶

▼米田学会長よりの挨拶



意見交換・懇親会会場より

盛会ありがとうございました



▲学会顧問・第1号学会賞
受賞の田畑日出夫氏による
乾杯の音頭

▼国際シンポジウム講演者の
G・ブレール博士も参加



▼功労賞の三友プラントサー
ビス株式会社から金原氏の
受賞の挨拶



▲恒例の塚田学会副会長による司会



▲峠実行幹事長による中締め

6. 学会表彰の授賞式について

学会表彰の設置と規約は、平成 29 年 12 月 8 日の第 9 回理事会で承認され、平成 30 年 1 月 26 日の第 4 回定時社員総会で報告され、学会の制度として成立しています。

記念すべき第一回、第一号の学会表彰を 7 月 3 日(火)の研究発表会終了後に開催いたしました。以下に学会表彰の種類と授与の位置づけを紹介いたします。

(1) 表彰に値する賞の種類

表彰に値する賞の種類には、学会賞、学術賞、技術賞、奨励賞、功労賞、優秀研究発表賞の 6 種類と必要に応じて

設けられる特別賞があります。それぞれの賞の位置付けは下表のようになっています。

さらに、今回から調査研究の発表案件のなかから優秀口頭発表賞、優秀ポスター発表賞を数件選考することになりました。また、各優秀賞のうちから 1 件を最優秀発表賞とすることとしました。各々の表彰候補者間には大きな差はないと思われませんが、規定により評価点や投票数等により選考させていただきました。発表者のモチベーション高揚に少しでも貢献できればと考えております。

なお、受賞者の紹介を「学会からのお知らせ」(p203～)に掲載しておりますので、ぜひご参照ください。

(文責：実行幹事長 峠 和男)

表彰に値する賞の種類と授与の位置づけ

賞の種類	授与の位置づけ (意味)
学会賞	本学会の発展に貢献もしくは環境放射能とその除染・中間貯蔵および環境再生に関する分野において特に優れた功績を認められた個人、法人、または団体・グループに贈呈する
学術賞	環境放射能とその除染・中間貯蔵および環境再生に関する学術研究において、顕著な貢献があると認められる個人、法人、または団体・グループに贈呈する
技術賞	環境放射能とその除染・中間貯蔵および環境再生に関する対策技術等に関して顕著な貢献があると認められる個人、法人、または団体・グループに贈呈する
奨励賞	環境放射能とその除染・中間貯蔵および環境再生に関する一連の論文、著作等、学術研究成果が特に優れた若手研究者に贈呈する。授賞対象者は概ね 45 歳以下の者とする
功労賞	環境放射能とその除染・中間貯蔵および環境再生に関する分野において科学・技術の進歩発展および環境の改善ならびに本学会の発展に、著しく貢献した個人、法人、または団体・グループに贈呈する
優秀研究発表賞	研究発表会において特に優れた研究発表を行った学生および若手研究者に贈呈する
特別賞	上記の各賞の他、必要に応じて特別な表彰を行うことができる



▲米田会長と表彰者全員(出席者)の集合写真



◀表彰式のリハーサル風景



▲表彰者に授与した記念のクリスタル盾